

L1/L2グループワーク談話における言語調整行動の分析

An analysis of linguistic adjustment in L1/L2 group work discourse

渡辺 文生, 山形大学

Fumio Watanabe, Yamagata University

1. はじめに

本研究の目的は、オンラインの課題解決型授業におけるL1/L2場面のグループワーク談話をもとに、相互理解とラポール形成のために行われる言語調整行動を国際共修の観点から質的に分析することである。分析対象データは、日本の大学において2025年に行われた大学院共通科目における専攻横断型で日本人学生・留学生が混じったグループによる課題遂行型談話である。

大学院共通科目とは、現在、日本の多くの大学院で設置が進められている授業カテゴリーで、情報伝達力・コミュニケーション能力・チームワーク力を養成することが目的の一つとして挙げられている。それらの中には、専攻横断型のグループワークを含むものもあり、そこでは日本人学生も留学生もそれぞれの専門的な知識に基づいて議論し、課題解決に向けた意見をまとめていくことが求められる。

国際共修とは、「文化的背景が多様な学生によって構成される学びのコミュニティ（正課活動及び課外活動）において、その文化的多様性を学習リソースとして捉え、メンバーが相互交流を通して学び合うこと（坂本・堀江・米澤 2017）」と定義される。大学院共通科目のグループワークは、国際共修の場であるにとらえることができ、日本人学生にとっても留学生にとっても、多様な言語・文化的背景を持つ人々との相互理解および関係構築のために必要となる言語調整能力や異文化間コミュニケーション能力の習得が課題になる。本研究は、国際共修におけるコミュニケーションのあり方を探るという研究プロジェクトの一環として、グループワーク談話の実態を捉えようとするものである。

2. 先行研究

「共通語としての日本語（Japanese as a Lingua Franca: JLF）」における相互言語調整を分析した研究としては、清田（2014）、竹井ほか（2023）が挙げられる。清田（2014）は、大学における相互学習型活動を対象に、L1話者である日本人学生の言語調整行動を分析し、意味・理解・話題に関わる調整にとどまらず、母語場面では見られない配慮行動や円滑化行動を含む言語調整行動を行っていたと述べている。竹井ほか（2023）では、3つの場面（L1場面、L1/L2場面、L2場

面) によるオンラインの課題遂行型会話を対象に、発話の構造的なタイプ、疑問表現、相手発話の繰り返しについて、L1話者・L2話者それぞれの使用傾向を分析している。

ラポールとは、「人間同士の間を生じる波長が合う、共感が持てる、信頼感が持てる、暖かさを感じあうといった感情（佐々木 1994）」と説明される。李（2015）は、日中接触場面の会話データを観察し、スペンサー＝オーティ（2004）による対人関係の管理に関わる枠組みである「ラポールマネジメント」に基づき、「同意や共感をはっきり示し、共通点をアピールする」など23種類のラポール構築に有効なストラテジーを「ラポールストラテジー」として提案している。

3. 調査の概要

調査対象として取り上げる大学院共通科目は、文系の研究科に所属する一年次生全員を対象とするものである。授業はZoomによるリアルタイム・オンライン形式で行われ、全8回の授業のうち、第1回目（ガイダンス・グループワークの試行）と最終回（総括・全体討議）を除いた6回の授業において、3つのテーマでそれぞれ2回ずつの授業を行う。1回目ではゲストスピーカーが講義を行い、次回までの課題を出し、そして2回目では課された課題についてそれぞれが調べてきたことをもとにグループワークを行う。グループワークの後には、それぞれのグループで話し合った結果を発表者が報告し、それに対してゲストスピーカーが講評を行う（渡辺 2025）。

グループの編成は、1グループ3～4名のメンバーで構成される。研究科に属する3つのコースの学生が必ず1名以上配置され、留学生は1つのグループに複数名が入らないよう分散して配置される。グループワークは、Zoomのブレイクアウトルームの機能を用い、30分間の時間設定で行われる。グループワークの際には、ファシリテーター・書記・タイムキーパー・発表者の役割分担を決めて行うように指導される。

本研究では、2025年度に行われた当該授業において、留学生を含む以下のメンバーによるグループワーク談話4例をデータとして取り上げる。L2話者である留学生CN01の母語は中国語で、日本語能力試験のN1取得者である。

分析データのグループメンバー

メンバー	CN01	JP01	JP02	JP03
専攻	日本語学	国際関係論	スポーツ科学	発達心理学

2025年度の授業では、ゲストスピーカーの講義に基づく3回のグループワークの他に、第1回目の授業時に予行演習としてのグループワークを行った。それは、以前の年度において留学生と日本人学生のグループメンバーのあいだで、お互いへの配慮による間接的な言語調整行動が取られたが、結果的に意味交渉が回避され、相互理解につながらなかったという事例（渡辺 2025）が見られたため、グループメンバー同士の顔合わせの機会にもなるとして設定したものである。以下のグループワーク談話の分析においては、相互理解とラポール形成という観点から発話のやりとりを取り上げて詳しく見ていくことにする。

4. グループワーク談話の分析

4.1 データ1：山形市の日帰りツアーの計画

グループワークの課題は、山形市を訪問してくる高校時代の友人と巡る日帰りツアーを計画するというもので、グループワークの役割分担などグループワークの方法についてガイダンスが行われた後に、グループワークの試行として行われたものである。この課題が他の3つのデータと異なる点は、下調べなしにその場でグループメンバーそれぞれの知識と経験をもとに話し合っ計画を一つにまとめるという点である。グループメンバーの役割分担は以下の通りである。

テーマ：山形市の日帰りツアーの計画

実施日：2025年9月29日

メンバー	CN01	JP01	JP02	JP03
役割	タイムキーパー	書記	ファシリテーター	発表者

データ1の談話展開は、まず最初に挨拶の後、役割の分担、自己紹介が行われた。その後、ツアー計画の話題に移り、目的地・食事場所・移動手段の順に決定されていき、計画内容の確認の後、残った時間に冬の山寺についての雑談という流れであった。

(1) そば屋の名前をチャットで送ることについてのやりとり¹

発話番号	話者	発話
269	CN01	え読み方わか、じゃチャットに送りますね、
270	JP02	ありがとうございます。
271	JP03	おー、ありがとうございます。
272	CN01	読め読めませんからすみません。
273	JP02	いえいえそんなありがとうございます。

¹ 書き起こしにおける [] は同時に発話されている部分、**は音声不明瞭で聞き取れない部分を表す。

		《中略》
298	CN01	えっ、どうやって、チャ、あのグループだけに送ります？
299	JP02	チャットの、それとも宛先のところで、あーそうかできないのかな、
300	JP03	全員かホストしかないですね、
301	CN01	えーっ。
302	JP02	全員って、
303	JP03	(笑) あ、こ、ここじゃないぜん全員？
304	JP02	この中にしてほしんだけど、
305	CN01	全員、送ってもだい、だいじょぶかな？
306	JP02	だいじょぶかな？
307	JP01	送信先、
308	JP03	まあな何かのご飯屋さんの名前ぐらいにしか (笑)
309	CN01	送りますね、
310	JP02	はい。
311	CN01	はい。
312	JP02	やっちゃいましょう、
313	CN01	あー、恥ずかしい、
314	JP02	[(笑)]
315	JP03	[(笑)]
316	JP02	おー。
317	JP01	やばいやばい、(笑) オーケーです。

(1) では、ツアー目的地となった山寺での昼食場所について、CN01が知っているそば屋にしようということになったが、CN01はそのそば屋の名前は分かるけれども、その漢字の読み方が分からないので、それをチャットで送ろうとしている。発話番号272でCN01は、「読め読めませんからすみません。」と不理解の表明、および、謝罪を行っているが、これは弱みの共有という自己開示を行っているものと捉えられ、それに対してJP02は発話番号273で「いえいえそんな」と謝罪の否定を行っている。これは、清田（2014）の「留学生の不理解の表明を受け入れる」という理解に関わる相互調整行動であり、李（2015）による「相手の自己卑下を否定し、相手を持ち上げる」というラポールストラテジーと捉えることができる。

発話番号298以降のやりとりは、チャットを「全員」宛に送信した場合に、それがブレイアウトルーム内の全員だけなのか、それとも、他のブレイクアウトルームも含めた授業受講者全員になるのか分からないことに起因するやりとりである。ここでは、発話番号304から306のCN01とJP02の発話のやり取りにおいて、敬体から常体へのスタイル・シフトが見られる。また、発話番号312のJP02の発話は、敬体ではあるが「やっちゃう」という表現は非常に口語的である。発話番号313でCN01は「あー、恥ずかしい」と感情の表出を行い、それに対して発

話番号314から317で3名の日本人学生は、CN01の感情の表出とチャットの送信に対して笑いなどの肯定的反応を見せている。このようなスタイルの使い分けや、感情の表出、および、それに対する肯定的態度の表示により、CN01によるチャット送信がグループの協働作業ととらえられ、それがラポールの形成に寄与していると言える。

データ1のグループワークでは、一通り課題のツアー計画がまとまった後に、JP01による冬の山寺での凍った階段に関する怖かった経験を話題としたやりとりもあった。このような自己開示による話題の選択もお互いを受け入れていく姿勢を示しているといえられる。

4.2 データ2：家族心理学

グループワークの課題は2つに分かれており、課題1は、子どもが育つ場としての家族（家庭）の機能として変わらないもの（不変なもの）があるとしたら、それは何かについて話し合うことで、課題2は、「親子の絆」あるいは「家族の絆」とは、いったい何なのかについて話し合うことであった。グループメンバーの役割分担は以下の通りである。

テーマ：家族心理学

実施日：2025年10月20日

メンバー	CN01	JP01	JP02	JP03
役割	書記	発表者	タイムキーパー	ファシリテーター

データ2の談話展開は、まず役割分担が行われ、議論の進め方についての確認、グループメンバーそれぞれが調べてきたことの報告の後、課題1、課題2それぞれに関する総括、書記による記録内容の確認と書記への労いというものであった。L2話者のCN01が書記を行うということで、CN01が議論の要点を記録しやすくするようなL1話者による言語調整行動が随所に見られた。

(2) 書記の記録を手助けするやりとり

発話番号	話者	発話
115	JP02	CN01さん大丈夫そうですか？ 簡潔に、言うと、ま2点です【よね、】
116 ～121	JP01	【簡潔に】 言うと、そうですねその一、《中略》子どもも、その一、はい、親子のつながりを感じることができるようにするべきじゃないかなと思いました。
122	JP02	てな感じの【**】ですCN01さん、
123	JP03	【うんうん。】
124	CN01	あー、ちょっと難しいです。

125	JP03	えっと、あれかな？んーとー、保護、親、そうまあそういう、こう子どもに対して、よくない。行いをした親には、更生の機会を、まあ与えた方がいいって感じだ、ですよね簡単に
126	JP01	そうです。
127	JP03	簡単に[言うと、]
128	JP01	[はい。] ありがとうございます。
129	JP03	えー、あとは、あれかな、人権に、とく、ん特化してるっていうか？先進国的な、アメリカのはずなのに、まあそういう子どもの権利に関する条約は批准してなくて、それがなんでかなっていう感じですね、
130	JP01	そうですね、

(2) では、まずJP02が発話番号115で、それに先行するJP01の報告について述べようとしていることは2点であるとJP01に確認要求を行っている。それに対する発話番号116から121のJP01による報告の要約に対し、JP02は発話番号122で、今度はCN01に対し理解したかどうかの確認要求を行っている。その確認要求に対しCN01は発話番号124で不理解の表明を行っているが、これは(1)の場合と同様に弱みの共有であり、かつ、間接的な助けの要請と受け止められる。それを受けて今度はJP03が報告の要点を一文にまとめて言い換え、その言い換えについてJP01が感謝し同意表示を行っている。

(3) 書記作業に対する労いのやりとり

発話番号	話者	発話
277	JP02	このメモこのまま上から読んでっていいんじゃないかなー、
278	JP03	うん。
279	JP01	あーもうじゃ、もうよ読んでいきます、[ずる、]
280	JP03	[(笑)] はい。
281	JP02	CN01さんもうまくまとめてくれてるんで、
282	JP03	すごく綺麗です。
283	JP02	うん。
284	CN01	あ[ありがとうございます。]
285	JP01	[そうですありがとう] ございます。

(3) は、グループワークの成果を発表する役割であるJP01が発表内容を確認する文脈のやりとりである。JP02が発話番号281で「うまくまとめてくれてる」とCN01の書記作業を評価し、JP03も発話番号282で「すごく綺麗です」と同様に評価を述べ、さらにJP01も発話番号285でJP02、JP03の評価に同意表示し感謝している。それに対して、CN01も発話番号284で感謝の表明を行っている。このように、データ2のグループワークでは、相互理解を目指した言語調整行動を通し

グループワークの課題という協働作業を遂行し、それによってお互いのラポールを形成していきっていると捉えられる。

4.3 データ3：ジェンダー平等

グループワークの課題は、自分にとって身近な自治体（居住自治体、出身自治体等）におけるジェンダー平等に関する現状と課題を、他の自治体（同規模の自治体であることが望ましい）と比較しつつ調査し、今後のあり方について提言をまとめるということであった。グループメンバーの役割分担は以下の通りである。

テーマ：ジェンダー平等

実施日：2025年11月17日

メンバー	CN01	JP01	JP02	JP03
役割	タイムキーパー	ファシリテーター	発表者	書記

データ3の談話展開は、まず役割分担の後、グループメンバーそれぞれが調べてきたことの報告、発表内容の確認が行われ、その後パートナーシップ宣誓制度を話題にした雑談というものであったが、談話の大部分は調べた内容の報告で占められていた。CN01の役割はタイムキーパーであったため、データ2でのようなCN01の理解に配慮したL1話者のメンバーによる特別な言語調整行動は見られなかったが、反対にCN01の方からL1話者のメンバー、特に書記のJP03の理解に配慮した言語調整行動が見られた。

(4) 相互理解および書記作業に配慮した報告のやりとり

発話番号	話者	発話
119	CN01	はい。と、私ちょっと話が長いんですけど。はい。えーと、聞こえますか？
120	JP03	[聞こえまーす。]
121	JP01	[あだいじょうぶです。]
122	CN01	はい。えーと私は、出身地である中国の河南省について、えーと調査しました。河南省。
123	JP03	おー。かな、これかな？ はい。
124	CN01	えーと、はい、そうです。
125	CN01	えーと比較対象として、と人口規模が、比較的によく。伝統的な、色彩が残ってる。日本の。山口県を選びました。
126	JP03	山口県。
127	CN01	はいえーと、教育経済、政治参画という3つの視点から、両地域を比較して、今後目指すべき方向性について提案を行います。《中略》女子が早い段階で、えと学業断念、せざるを得ないケースも見られます。（ポーズ）んと次、経済活動への参加については、《中略》えとまとめますと、河南省は、《中略》はい最後に、これらの課題を解説、解決するためのていぐん、提言をします《中略》はい。以上です。

(4) は、CN01による調べてきたことの報告のやりとりである。まず最初の発話番号119では、「話が長い」と総括型のメタ言語表現で前置きを行っている。発話番号122から124では、「河南省」という語について、書記のJP03と確認しながら書記作業への協力を行っている。発話番号127では、「3つの視点から...提案を行います」や「まとめますと」など様々なタイプのメタ言語表現を用いて報告しているが、これらのメタ言語表現や途中に挿入されるポーズは聞き手の理解に配慮した言語調整行動であると捉えられる。

(5) グループメンバーが調査してきた内容に対するやりとり

発話番号	話者	発話
162	JP02	みなさんがいい感じにばらけたところから持ってきてくれたので、
163	JP01	そうですね、なんかみんな山形とかじゃなくてよかったです。
164	JP02	(笑) ですね、
165	JP03	(笑) おかげで出身地がわかるっていうね、
166	JP01	確かに。
167	CN01	そうですね、
168	JP02	***わかるの。
169	JP01	ばれ [ちゃう。]
170	JP02	[山形の] 人いないっていう。

(5) では、グループメンバーに山形出身者が一人もいないために、調査してきた自治体が分散していたということが話題になっている。山形出身者が一人もいないということは、山形市の日帰りツアーを計画するというデータ1のグループワークで一度話題になったことであるが、その話題をもう一度導入し同意表示しあうにより、お互いの共通点を再確認することにつながり、ラポールを強化していると捉えられる。

4.3 データ4：音楽文化

グループワークの課題は、芸術文化活動について、地域社会にはどのような課題が存在するのか考察することと、その上で、山形交響楽団といかに連携するか企画・立案を行うことであった。グループメンバーの役割分担は以下の通りである。

テーマ：音楽文化

実施日：2025年11月17日

メンバー	CN01	JP01	JP02	JP03
役割	ファシリテーター	タイムキーパー	書記	発表者

データ4の談話展開は、まず役割分担の後、グループメンバーそれぞれが調べてきたことの報告、発表内容の確認が行われ、その後このグループでのディスカッションについて、および、それぞれの研究の状況を話題にした雑談というものであった。最後にこれでこのメンバーによるグループワークが終わりになることに関しお互いに感謝の表明が行われた。

(6) CN01の報告に対する意味交渉

発話番号	話者	発話
145	JP02	すみません二個目、ちょっと聞き逃してしまったんですけど、もう一度いいですか？
146	CN01	はい、
147	JP02	地域 [格差]
148	CN01	[えー、] 2番目ですか？
149	JP02	2番目で、えと地域格差、伝統の継承の問題は聞き取れたんですけど、二つ目ちょっと聞き逃してしまったんですけど、
150	CN01	はい。えーと若年層の流れ、
151	JP02	あー、はい。あー。
152	CN01	若年層の離れ、
153	JP02	じゃくねん、じゃく、若年層
154	CN01	若者、若者と年上？
155	JP02	あー、じゃあ、若年層の、あーもうやばい。タイプが死んでる、
156	JP03	がんばれ。かんばれ。 (笑)
157	JP02	めっちゃ苦手なんですよこれ。若年層、若年層離れとかでいいですか？
158	CN01	あはい。
159	JP02	ば、な、れ？
160	CN01	ばなれ。
161	JP02	って感じですか？
162	CN01	はい。だいじょ [ぶです。]
163	JP02	[はい。] 了解です。

(6) では、芸術文化活動から若年層が離れていってしまっているということを表す「若年層 (の芸術文化活動) 離れ」という表現を、CN01が先行文脈で「若年層の流れ」と言ったことがきっかけになって意味交渉が始まっている。JP02は発話番号145および149で「聞き逃してしまった」と言って繰り返し要求を行っているが、間接的な修正要求であると考えられる。それに対しCN01は発話番号152で表現の修正を行う。その後、JP02は発話番号155および157で自己卑下を伴う発話をし、CN01とやりとりしながらその修正された表現の確認・記録を行っている。「タイプが死んでる」や「めっちゃ苦手なんですよこれ」という自己卑下は、CN01による「若年層の離れ^{はな}」という表現を「若年層離れ^{ばな}」に他者修正す

るという相手のフェイスを侵害する行為に対し、自分のフェイスを貶めることによってバランスを取り、ラポールを維持しようとしていると捉えられる。

5. むすび

以上、オンラインの課題解決型授業におけるL1/L2場面のグループワーク談話について分析を行った。今回分析したグループワーク談話では、自己開示や感情の表出を含む協働作業によるラポールの形成が観察された。そして、お互いの役割に対する配慮に基づく相互理解のための言語調整行動が効果的に機能していたのは、形成されたラポールに基づくものであると捉えられる。

国際共修の授業デザインという観点では、最初に行うグループワークの課題にメンバー間のラポール形成を促す工夫を施すことが重要であるということが分かった。また、相手の理解に配慮して報告・発言するためには、メタ言語表現を意識的に使用する必要があるということも示唆された。

この研究は、JSPS科研費25K06341の助成を受けたものである。

参考文献

- 清田淳子（2014）「留学生と相互学習型活動における日本人学生の言語的調整行動と学び」『立命言語文化研究』26（3）127-150.
- 坂本利子・堀江未来・米澤由香子（2017）『多文化間共修：多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社
- 佐々木倫子（1994）「会話スタイルとラポート—日英・若い女性の座談例から—」『国立国語研究所報告107 研究報告集15』，252-286.
- スペンサー＝オーティ，ヘレン（2004）『異文化理解の語用論』田中典子ほか訳，研究社（原典：Spencer-Oatey, Hellen 2000）
- 竹井光子・藤原美保・下條光明・渡辺文生（2023）「第一・第二言語話者による「共通語としての日本語」における言語調整の場面別考察」2023 AATJ Annual Spring Conference（2023年3月16日 Boston）パネル発表資料 American Association of Teachers of Japanese.
- 季珂南（2015）「日中大学生接触場面の初対面雑談会話におけるラポールマネジメント —トピックの選択および話題部の導入と終了を中心に—」名古屋外国語大学博士学位請求論文
- 渡辺文生（2025）「大学院共通科目におけるL1/L2グループワーク談話の分析」『2025 CAJLE Annual Conference Proceedings』，195-204.